

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520257

研究課題名(和文)近世後期以降の俳諧資料の収集と整理

研究課題名(英文)A Classification of Haikai Materials from the Second Half of the Edo Period to the Taisho Era

研究代表者

富田 和子(TOMIDA, KAZUKO)

椋山女学園大学・生活科学部・助教

研究者番号：20155568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：従来、俳諧の停滞期と言われる近世後期以降の遊戯的な雑俳を含む資料紹介・翻刻は少ない。そこで、収集した資料群の中から、1750年に出版された、撰者の病気による遅撰の断り書きを載せるという珍しい雲鈴撰の会所本『誹諧冬至梅』など、3点を紹介した。
次に、大正期における東三河を拠点とする狂俳壇の組織力・機動力や、お高撰の俳諧会所本の興行時期を把握した。更に、調査の中で得られた石橋庵真酔の墓石・歌碑について公表した。

研究成果の概要(英文)：Up to now it is said that from the second half of the Edo Period is the period when haikai made no progress. There has been hardly any introduction to the updated version about haikai, including zatsuhai, from this time. So three haikai anthologies selected by Unrei in 1750 were introduced in this updated version. These are unusual books because it is written that a judge being sick was the reason that the books were behind schedule.
Next, I discussed the organizing ability of the kyohai group which was active in the East Mikawa area in Aichi-ken during the Taisho Era. In addition, this analysis determines the time when the haiku anthology selected by Otaka was published. Moreover during this investigation, the finding of Ishibasian Masui's tombstone and monument was announced officially.

研究分野：人文学・文学・日本文学

キーワード：俳諧・雑俳 近世文学 名古屋俳壇の周辺

1. 研究開始当初の背景

尾張・三河・美濃は俳諧の盛んな地域である。そして、俳諧は魅力的であり、近世期以降、幅広い層の人々が活躍した。そのため、特に蕉風俳諧についての研究は多く、成果が上がっている。しかし、蕉風俳諧に代表される芸術的な方向と、前句付俳諧に代表される遊戯的な方向があることを、俳諧の実態として重層的にとらえ考察すべきことを指摘されながらも、遊戯的な雑俳を含む研究は少ない。現在の俳諧研究は芭蕉及びその門人に片寄る傾向があり、地方の俳人・俳壇に関する研究は手薄である。そして、それらに関する資料の多くは個人蔵である。例えば、俳句の短冊や俳人の書簡など、研究史上貴重なものも、狂俳関係のものなどは、子孫がその趣味を持たない場合、捨てられたり、古書市で処分されたりして散逸するケースが多い。それを防ぐためにも、急いで調査をする必要がある。

さらに現代は、社会の変動にともなって、創作・享受の場が崩壊しつつある。先に「近世俳諧資料の収集と整理」(研究課題番号：18520141 2006年度～2008年度)で一部を報告したが、雑俳そのものも持っている性格、環境の変化、ともに困難な問題があり、より一層の研究が急がれる。

2. 研究の目的

従来俳諧の停滞期と言われる近世後期に着目する。そして、それ以降、現在までの東海地方の俳諧資料を収集し整理して、その特徴を明らかにすることを目的とする。特に、尾張・三河・美濃の資料を扱う。そして、

- (1) 俳諧史の研究において、手薄であった遊戯的な雑俳を含む俳諧資料の収集と整理を行う。
- (2) 俳諧や狂歌は、読み捨てられることが多かった。そして、共に、真酔や水魚洞をはじめとして共通する作者や享受者がいた。その点に着目し、俳諧と狂歌など他の流行

した短詩系文芸をどのように愛好し関わりを持ってきたか。それぞれの影響関係はどうであったかについても窺える資料の収集を行う。

以上の点に、留意して、先の研究課題「近世俳諧資料の収集と整理」で見落としの埋もれた資料を発掘し、貴重な俳諧資料の散逸を防ぎ、価値を正しく評価して、今後の俳諧史研究に寄与することが大きな目的である。

3. 研究の方法

以下の手順によった。

- (1) 東海地方に散見する近世後期の俳諧・狂歌資料の収集を始める。

個人所蔵の資料の撮影・複写を行う。

点者・愛好者からの聞き取り調査。

尾張狂歌の影響関係を視野に入れて、俳諧関係者の狂歌資料を収集する。

地方の図書館・博物館所蔵の埋もれた俳書や引札類の収集と整理を行う。

- (2) 収集した資料を整理する。

- (3) 貴重な資料を紹介し、考察する。

- (4) 収集・整理した資料群から、俳諧・俳壇の実態をとらえ、考察する。

4. 研究成果

以下の結果を公表した。

- (1) 遊戯的な雑俳を含む資料紹介・翻刻が少ないので、『はいかい花の遊び』『はいかい鶉の初音』『俳諧冬至梅』の3作品を翻刻して紹介した。他に、(2)にあげる論文の末尾に、お高撰「はいかい正月集」「はいかい百戦もの語」抜書の翻刻を付して紹介した。

雲鈴撰会所本『俳諧冬至梅』の紹介と翻刻(「椋山女学園大学研究論集」46号人文科学篇、2015年)

雲鼓の門人で、雑俳点者である雲鈴撰の俳諧会所本『俳諧冬至梅』〔寛延3(1750)年11月〕を翻刻紹介した。本書は、見ることのできた最後の会所本で、28ヶ国から11,806

句を集め、上位 420 句を掲載したものである。そして、病気による遅撰の断り書きに加え、句を募集中の六月切の万句会に、病状次第で代役を立てることが記された。更に、金沢や名古屋の愛好者たちが雲鈴や会所の藤松軒を称える句が載り、最期まで人気の高かったことがわかる。

雲鈴撰会所本『はいかい花の遊び』『はいかい鶉の初音』の紹介と翻刻（「椋山女学園大学研究論集」45号人文科学篇、2014年）

雲鼓の門人で、雑俳点者である雲鈴撰の俳諧会所本・一枚刷を 表 1・表 2 にまとめ、翻刻の所在を記した。次に、病気による遅撰の断り書きを載せる『はいかい花の遊び』（寛延3年2月）『はいかい鶉の初音』（同年5月）の2編を翻刻し、簡単な語釈をつけ紹介した。宮田正信氏（『雑俳史の研究』赤尾照文堂 1972年）が指摘された、十番目毎に長句など破調の句が置かれる雲鼓流俳諧の特徴は、特に『はいかい花の遊び』に顕著であった。

(2) 収集した資料群の中から、特に次の3点を論じた。

寛延三年地方会所本にみる雑俳点者雲鈴とその影響（「東海近世」22号、2014年7月）

雲鼓の門人で、京の雑俳点者である雲鈴（1674～1751）の略歴を確認した上で、寛延三（1750）年に行われた句会興行の延引を詫びる断りの口上が3冊の会所本に残ることから、当時、地方で雑俳が大流行し、地方点者が輩出する中でも、地方における雲鈴の人気が高かったことについて考察した。

そして、雲鈴の病状から、奈良大学蔵の興行年未詳の勝句刷「奉納五ヶ所」（三月）

162-23 は寛延三年頃のものではないかと推定した。

②大正十年頃の東三河の狂俳—銀珩社「若竹集」を中心に（「椋山女学園大学研究論集」第44号人文科学篇 2013年3月）

東三河を拠点とする銀珩社が、知新会の内紛をきっかけに新しい狂俳を求めて、大正7年、遅くとも翌年2月に独立し、3月又は5月から機関誌「若竹」を創刊したことを明らかにした。次に、第一次資料群「第30回分若竹応募綴」「第30回 若竹巻本」「夢廼家圃 俳名披露 兼銀珩社新加入記念 狂俳大会」や他の狂俳誌から、銀珩社の正社員になることはとても名誉なことで、大正10年2月当時の社員は23名、月並会は花巻方式で、その組織力・機動力の良さを明らかにした。

お高撰俳諧会所本の興行時期の再検証付、翻刻：お高撰「はいかい正月集」「はいかい百戦もの語」抜書（「椋山女学園大学研究論集」第43号人文科学篇 2012年3月）

お高が本格的に点者活動を始めたのは、会所の存在を強く意識し始めたと思われる「はいかい角文字」・「はいかいみどりの衣」を披露した安永元（1772）年頃であった。そして、題に「はいかい」と平仮名で角書するものはこの頃だけで、それ以後は「俳諧」と漢字を使用したことが推測でき、お高撰の俳諧会所本の特徴の一つが窺えた。また、末番句の配置から、当時すでに俳諧式目とは一味違った撰句基準が形成されていたことが窺えた。お高撰「はいかい正月集」「はいかい百戦もの語」抜書の翻刻を付す。

(3) 研究ノートとして、調査の中で得られた「石橋庵真酔の墓石・歌碑」（「東海近世」20号、2012年）について、公表した。

石橋庵真酔は、『東海道中膝栗毛』で有名な十返舎一九とも交流があり、尾崎久彌氏が「江戸時代後期の名古屋の素人文壇を牛耳った」と評された、戯作者として有名な文芸家である。その墓石・歌碑は、平成4年に整理されたと紹介したが、現在も残ることがわかったので、真酔の略歴と人物像を紹介した上で、墓石・歌碑についての調査報告をした。

更に、埋もれた資料を発掘し、貴重な俳諧

資料の散逸を防ぎ、価値を正しく評価して、今後の俳諧史研究に寄与することに努めたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

- (1) 富田 和子、「寛延三年地方会所本にみる雑俳点者雲鈴とその影響」、『東海近世』(東海近世文学会) 査読有、22号、2014年、P28~P39
- (2) 富田 和子、「大正十年頃の東三河の狂俳—銀珩社「若竹集」を中心に—」、『椋山女学園大学研究論集』(椋山女学園大学) 査読無、44号人文科学篇、2013年、二一頁~三五頁
- (3) 富田 和子、「お高撰俳諧会所本の興行時期の再検証 付、翻刻：お高撰「はいかい正月集」「はいかい百戦もの語」抜書」、『椋山女学園大学研究論集』(椋山女学園大学) 査読無、43号人文科学篇、2012年、二三頁~三九頁

[雑誌掲載 資料紹介](計 3件)

- (1) 富田 和子、「雲鈴撰会所本『俳諧冬至梅』の紹介と翻刻」、『椋山女学園大学研究論集』(椋山女学園大学) 査読無、46号人文科学篇、2015年、一頁~一二頁
- (2) 富田 和子、「雲鈴撰会所本『はいかい花の遊び』『はいかい鶉の初音』の紹介と翻刻」、『椋山女学園大学研究論集』(椋山女学園大学) 査読無、45号人文科学篇、2014年、一頁~一六頁
- (3) 富田 和子、(研究ノート)「石橋庵真酔の墓石・歌碑」、『東海近世』(東海近世文学会) 査読付、20号、2012年、P125~P133

[学会発表](計 4件)

(1) 富田 和子、「柳亭兩人編『狂俳入門』と俳諧 狂俳句の推敲・俗談平話の理解」、『東海近世文学会』、2014年10月11日、熱田神宮文化殿

(2) 富田 和子、「寛延三年京雲鈴撰地方会所本にみる雲鈴の動向」、『東海近世文学会』、2013年7月20日、名古屋市鶴舞中央図書館

(3) 富田 和子、「九十年前の狂俳第一次資料 東三河「若竹集」を中心に」、『東海近世文学会』、2012年7月14日、熱田神宮文化殿

(4) 富田 和子、「お高撰会所本とその周辺」、『東海近世文学会』、2011年7月16日、熱田神宮文化殿

[その他]

ホームページ URL :

<http://web.sugiyama-u.ac.jp/~kazuko/mysite3>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富田 和子 (TOMIDA KAZUKO)

椋山女学園大学・生活科学部・助教

研究者番号 : 20155568

(2) 研究分担者

なし